

ブータン王国を皆様にご紹介できる機会を与えていただき感謝申し上げます。

仏教文化の影響を受ける以前のブータンでは、考古学的調査で4000年前には人が定住していたと考えられ、また紀元前2000年から1500年の遺跡も残されています。しかし1827年古都プナカで発生した大火事と1896年の大地震により殆どの古代の記録が失われてしまいました。

ここでは多くの研究家の皆様の著書や資料をもとにブータンの歴史に特化してご案内致します。

地理

ブータン王国は広大なヒマラヤ山脈南の麓に位置し、北は中国、南はインドの二大大国に挟まれた内陸山岳国です。国土の標高差は非常に大きく、南部の海拔100mから北部の7550mにわたっています。その為、気候も多様性に富んでおり、南部は通年暑く湿度が高く、7000メートル級の山々がそびえ立つ北部は一年中雪と氷河に閉ざされています。国土面積は約38,392平方キロメートルで九州とほぼ同面積、人口は約69万人です。首都ティンプーは標高2300mのところにあります。

世界で唯一チベット仏教（ドゥック・カギユ派）を国教としています。国名の「ドゥック・ユル」（雷龍の国）は、「ドゥックパ（カギユ派の中のドゥック派）の国」という意味です。民族はチベット系8割、ネパール系2割、公用語はゾンカ語。国旗の上部黄色は国王の権威を表し、下部オレンジ色は宗教的な修行と精神力を表し、対角線上には龍が描かれています。国花はメコノプシス＝ホリドゥラ、青色で芥子の花に似ています。国樹はイトスギ、国獣はターキン、偶蹄目でカモシカの仲間、反芻亜目のウシ科です。

仏教と政治

仏教がブータンに伝えられたのは7世紀とされ、全土に仏教が普及されたのは、747年インドの高僧パドマ・サンバヴァ（グル・リンポチェ）＊を開祖とするチベット仏教ニンマ派が、布教の為に訪れたのが契機だとされています。

＊ブータンでは今もパドマ・サンバヴァバ（グル・リンポチェ）が雌の虎の背中にまたがり、空を飛び山々を越え、チベットからやってきたという伝説が残り、瞑想を行ったと伝えられる聖地には「タクツアン＝虎の巣」と呼ばれる寺院が建立されています。17世紀に建てられましたが1998年に全焼し、現在の建物は2004年に再建されました。断崖絶壁に張り付くように建っているタクツアン寺院は多くの観光客が訪れています。

当時のブータンは、地方ごとに領主が支配する地方有力者による小規模の統治が行われていました。17世紀まで仏教諸派乱立、勢力拡大競争に伴う混乱が生じ、いわゆる群雄割拠の時代が続き、中央統一政権は存在していませんでした。

1222年、高僧パジヨ・ドゥゴム・シクポによって、チベット密教の一派であるドゥック派が伝えられ、定着して行きました。

1616年、ドゥック派の、チベット人高僧のンガワン・ナムゲル(シャブドゥン・リンポチェ)が化身ラマの転生者としてチベット南部(ブータン西部)に移りブータン各地に宗教・行政・防衛拠点としてのゾン*を建設しました。各地に割拠する群雄を征服、宗教的に厳正な政府(聖)と、非宗教的な政府(俗)を併せ持つ国家体制(国家政教並立体制=シャブドゥン体制)を考案し、ブータン統一を成し遂げたと言われています。

* 1637年に建設が開始されたプナカ・ゾンは全国のゾンの中でも、歴史的にまた宗教的にも最も重要なゾンです。20世紀に入ってからの大改修により、最も美しく、完成された内部を誇っています。第一回の国会もここで開催され、初代国王の戴冠式、第5代国王の結婚式もここプナカ・ゾンで行われました

1651年ンガワン・ナムゲル(シャブドゥン・リンポチェ)の死後、中央集権体制が確立し、聖俗が中央政府のもとに統治され、ドゥック派は権威の中心となり、現在ブータンの国教となっています。

内陸山岳地域であるブータンは17世紀より外敵からの侵攻と国内の豪族による内戦が続き、国内は安定しませんでした。高僧ンガワン・ナムゲル死後のブータンでは繰り返し豪族による内戦やチベット軍、モンゴル軍、また英領インドなど、外的からの侵攻も続いていました。

ブータンの政治形態は、長く僧侶の代表と、俗人の代表による国家政教並立体制(シャブドゥン体制)、聖俗二重統治でした。

19世紀末に東部トンサ郡の豪族ウゲン・ワンチュク(1862-1926)はこの体制を打破し、国内外の対抗勢力を抑えてブータンを改めて統一しました。

1907年、12月17日、プナカでの国家評議会において、宗教指導者や豪族、行政官たちの圧倒的な支持とイギリスの支援を得たウゲン・ワンチュクは武力でなく政治的選出のもとに初代ブータン国王に選出され「近代ブータン国家の父」と評価されています。公的にはこの年をブータン国家成立としています。現在のブータン王朝はこの時から現在まで106年間続いていることとなります。

王制

初代国王ウゲン・ワンチュク(在位1861-1926) は国民の生活向上、教育制度の普及、国内交通・通信網の整備、仏教の保護に力を注ぎました。また王朝基盤を確固たるものにすべく努め、外交的には南アジアで大きな勢力を有していたイギリスと1910年にプナカ条約を締結しました。これによりイギリスはブータンの独立を保障し、ブータンの外交統括権を得ました。ブータンはイギリスの後ろ盾を得ることで清朝からの影響も軽減できました。

第2代国王ジグミ・ワンチュク(在位1926-52)は依然台頭する旧支配勢力を抑止する数々の政策を打ち出しました。全土を県に細分し、公務員制度を整え、中央集権体制を確立するなど近代的行政機関としての政府の礎を築きました。インドがイギリス領から分離独立したのを機にブータンはインドと同盟関係を結びました。1949年のインド・ブータン友好条約では、イギリスと交わした条約と同じく、インドの保護下での独立、外交関係に関してはインド政府の助言に基づき実施することに合意しました。

1949年に建国した中国政府はブータンの最大の貿易相手国だったチベットを1950年、再統合するとの見解を發しました。ブータンは独立国家として存続して行くためにも、国際社会との関係の強化は何より重要な課題となりました。ブータンは多くの国費留学生を国外に送り込み欧米諸国で最先端の行政や経済、外交力を学び、国際的にも認知される国家の中樞を担う人材を多く養成しています。

第3代国王ジグメ・ドルジ・ワンチュク(在位1952-72)は農奴解放等の土地改革、教育の普及、議会制度改革等、近代化政策を更に推進しました。

1964年には地方豪族間の争いに起因する政治危機が発生、首相暗殺事件、宮廷革命工作の発覚などにより国王親政となりました。国王は自ら国民議会に自身の信任投票を求め、1969年に国民の絶対多数により信任されました。第3代国王は「国内政治にとって画期的な改革を推進した国王」として高く評価されています。1971年には国連加盟を達成しています。

第4代国王ジグミ・シンゲ・ワンチュク (在位1972- 2006)

1972年7月に第3代国王の病氣療養中であつたケニアでの客死により、16歳で即位されました。

1976年 GNH（国民総幸福量*）という建国開発理念を掲げられ、広く世界にブータン王国の存在を知らしめることになりました。2005年に第4代国王はご自身が王制を排し、国民主

権の総選挙による立憲君主制への移行を宣言され、2006年にはご長子の第5代ジグミ・ケサル・ワンチュク国王に王位をお譲りになりました。

2008年に初の成文憲法典公布が施行されましたがこの中には世界でも希有な国王の定年制や罷免についても記されています。将来もし国民にとり好ましくない暴君が誕生した場合ブータンの国民は決して幸せにはならないと、国王自らこの1項を加えられたそうです。

先代国王が敷いた近代化、民主化路線を継承・発展させ、圧倒的な力で国民を統率し、GNHの理念を提唱実現に努めた、世界の多くの指導者が敬愛してやまない第4代国王の知恵と見識に基づく偉業は数えきれません。

1989年 昭和天皇崩御に際して挙行された大喪の礼に、当時の第4代国王が来日されました。このような場合「弔問外交」を行うことが通例で、日本からの経済的支援や協力を仰ぐことはごく一般的に外交上行われていることです。しかし、ブータン第4代国王は「我々は天皇陛下に対する弔意を示すため来日したのであり、お金の無心のために来たのではない」という言葉を残し、大喪の礼のみ参列し帰国されました。大変な親日国でもあり、昭和天皇がご崩御なされた1989年1月7日から1ヶ月間、ブータン王国も喪に伏されました。そして2月に行われた大喪の礼には、34歳であった第4代国王が自国の民族衣装で参加されましたが、その凛々しく礼儀正しいお姿は当時マスコミでも話題になり、ブータンという国名をその時初めて耳にした方も多かったようです。

*GNH

第4代ジグミ・シンゲ・ワンチュク国王は、1976年にスリランカで開催された非同盟諸国会議後の記者会見で、GDPよりGNH(国民総幸福量)が大切だにご自身の建国開発哲学を明言され、それはブータンの国名と共に広く世界に知られるようになりました。国民の幸せや国の豊かさはGDP(国民総生産量)という経済を中心とした数値で測れるものではなく、GNH(国民総幸福量)で測られるべきだとの建国哲学です。既存の物質的な成長が必ずしも幸福と結びつくわけではなく、また国の経済発展は環境保全や文化的独自性維持と調和が取れていることが重要であるとしています。

1999年ブータン政府は国民の幸福を実現するための条件として【1】持続可能かつ公正な社会経済学的発展 【2】環境の保全 【3】文化の保護と促進(再生) 【4】良い統治の4つの指針を設け、国は開発計画をGNHの考え方に従って策定しています。

この年、王立ブータン研究所を設立し、GNHの理論研究とGNH調査技法の発展にも努めています。

2008年に発布されたブータン国憲法第9条2項には「政府の役割はGNHを追求できるような諸条

件の整備に努めることにある。」と明記され、政策を立案、調整するGNH委員会が重要な役割を担っています。

GNHを基本方針とする政策で国民の医療費と教育費は無料、海外からの煙草の持ち込みは禁止されています。伝統文化を重んじ、公的な場所では民族衣装の着用を義務づけています。観光事業に力を入れています。国の環境を保つ為に旅行者にいくつかの制限を設けています。国土の森林面積の割合を60%以上に維持することと定め、森林や伐採業務を国有化するなど自然環境保護を国是とするブータンはこの点でも世界中から注目を浴びています。絶滅危惧種であるオグロゾルが飛来するポプジカ谷では、オグロゾルを保護するために住民が地上の電線設置を一時断念しました（現在は地下ケーブルにより電化が実現）。これはブータンのGNHを象徴するエピソードの一つです。

民主政治

第5代国王ジグミ・ケサル・ナムゲル・ワンチュク（在位2006-）が第4代国王の譲位に伴い即位されました。

2007年12月及び翌年の総選挙を経て、2008年、民主的に選出されたブータン調和党・ティンレイ政権が誕生しました。その年の5月には国会が召集され、7月には初の成文憲法典が公布されるなど、ブータンは王政から議会制民主主義を基本とする立憲君主国への移行を遂げました。

2011年11月には10月ご成婚のジェツン・ペマ・ワンチュク王妃を伴い、国賓としてご訪日された。お二人の爽やかなお姿と国王陛下の国会でのメッセージは、東日本大震災に打ちのめされていた私たち日本国民に勇気と希望と忘れかけていた誇りを与えてくださったことは記憶に新しいと思います。

今年2013年7月の総選挙では国民民主党の党首、ツェリン・トブゲイ氏（47）が新首相に選ばれトブゲイ政権が発足しました。2大政党が掲げる政策に大きな違いはなく、GNHという国是に従い、物質的豊かさだけでなく、精神的な充足も重視した発展を目指す方針や立憲君主制は維持されます。

教育

ブータンでは他の多くの国と同じく、もっとも力を入れるべき政策が教育だと早くから認識されていました。1980 年半ばから英語が話せれば世界と対等に付き合えるとの政府の意向でブータンの学校での教育は基本的に英語で行われています。

全学年を通して、英語と母国語であるゾンカ語教育、数学とモラル教育の 4 教科は必須となっています。自国の文化や歴史を学び、人としての生き方を学ぶモラル教育の徹底に

GNH 哲学に基づくブータンの国づくりの姿勢がうかがえます。

また数学の指導書であればその 1 ページ目には「君は数学を教えるために教壇に立つのではない、ブータンの将来を担う人間をつくるために教壇に立つのだ。それを忘れるな」と記され、「人間」を育てることが教育の原点であることが明記されています。同時にブータンでは教育者自身が知識人であると共に人格者であることを要求されています。

第 5 代国王陛下は 2006 年に王位を継承されてすぐに、国民と直接触れ合いたいと国中を隈なくお訪ねになりました。その時のお写真も残っていますが、国王陛下は腰を屈め国民の目線と同じ高さで手を握り話しかけておられます。

ある小学校を訪問された折には「君たちに何かあったら、私が全力で君たちを守るからね」と子供達に言われたそうです。

ブータンの子供達一人一人は自分の国の言語と歴史を学ぶことで愛国心が育ち、モラル教育を通し他者との関わり方、生き方を学び、また国王はじめ周りの大人達から愛されている事を実感することで自己肯定に基づく向上心が育っていくように思います。高い英語力を武器に積極的に海外と交流し、見聞を広め、より高度な知識と外交力を修得することも可能になります。

ブータンでは要職にあるほとんどの人が海外留学を経験しています。欧米諸国で大学教育を受け、高い教養と品性を身に付け、ブータンの発展のために貢献しています。

ブータンのこれから

ブータンは1999年まで一種の鎖国状態にあったといえます。それ故、独自の文化や生活様式などが保たれ、GNHの建国哲学と共に、先進国にとっては憧れの桃源郷のような国でした。しかし1999年以降はテレビやインターネットの解禁により、世界中の情報がブータンにも届くようになりました。こうした状況はブータン国民に異なった価値観を持った外の世界を知らしめ、若者達を中心として人々の物欲を刺激し高めつつあるようです。一方、都市への若者の人口流入や雇用不足などの問題も起こっており、政府は持続可能な解決法を見出す必要に迫られています。

これらはブータンに限らず経済発展を遂げた我々にも共通する普遍的な問題を含んでいます。

南部のネパール系の移住者に関する問題や西洋文化の流入による、独自の文化の消滅の危機にも直面し、これからどう国の舵取りをしていくのかブータンにとって大きな局面を迎えることになるでしょう。

ブータンの人々の仏教に基づく世界観と政治を司る人たちの高い見識と、何より第4代国王陛下が提唱されたGNHの建国開発哲学に期待し、今後の推移を見守りたいと思います。

在東京ブータン王国名誉総領事

徳田 ひとみ